

聴覚障害者の情報環境改善のためのデザイン提案（3）

—「聞こえない不便さ」の理解を広げるイラスト集の作成—

デザイン学科 松井 智・伊藤三千代

要旨：聴覚障害者の生活の実態に関する情報を発信し、障害に対する理解を促進することを目的に「聞こえない不便さイラスト集」を作成した。デザインを学ぶ聴覚障害学生10名が生活の実態を話し合い、1) コミュニケーション、2) 音・音声による情報伝達、3) 情報機器を通しての情報伝達等の観点から9グループ27点のイラストと説明文を添えたパネルに仕上げた。パネルは聴覚障害関係のイベントや情報誌で公開され反響を得た。

キーワード：聴覚障害 不便さ 障害理解

1. 聴覚障害の理解の現状

聴覚障害者の社会的不利の側面からの生活改善にとって、「聞こえないこと」への理解の促進は重要である。しかし、本人から社会に対する訴えは「障害を理解してほしい」という具体性のない内容で終わることが多い^{*1}。また、聴覚障害は外見からは分かりにくい障害であり、社会の聴覚障害に対する知識、認識は高いとは言えない。

“バリアフリー”という言葉が汎用されるようになり、企業の商品開発やサービス開発にとっても、障害者のニーズに合わせた対応が進みつつある。しかし、車椅子使用者、視覚障害者、高齢者に対するバリアフリー対応商品の開発が進む中で聴覚障害者への対応例をほとんど見ない^{*2}。このことも、聴覚障害に対する知識、認識が低いための結果といえる。また同時に、障害者本人からの具体的な説明に乏しいことが一因と考えられる。

障害に関する知識を広げるための方策としては、障害の生理学・心理学・教育学等の解説、障害をシュミレーションによって体験的に学習させるなどがある。しかし、いずれも専門的であったり装置を必要としたりするため、より生活場面をイメージしやすく、分かりやすい情報が必要と考えられる。

2. イラストパネル作成の経過

本学デザイン学科学生10名が日常の不便さを話し合い、9グループ27点のパネルに仕上げ、グループごとに見出

しをつけた（写真1）

聞こえない日常生活の不便さは、伝達形式の面から、1) コミュニケーション、2) 音・音声による情報伝達、3) 情報機器を通しての情報伝達等、また生活場面別に、1) 家事や家電製品使用、2) 町の中での移動、3) 施設の利用、4) 電話・テレビ等の情報機器使用、5) 乗物の利用、6) 買い物や食事、7) 会議や講演会への参加、8) 自分自身が出している音への不安などが挙げられた（図1）。

なお、作品は、聴覚障害関係のイベントに展示（写真2）^{*3}し、同時に情報誌^{*4}に掲載された。

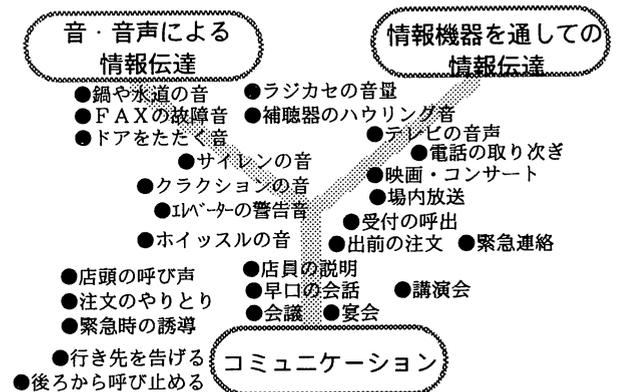


図1 聴覚障害者の日常生活の不便さ

*1 聞こえない人たちが感じている朝起きてから夜寝るまでの不便さ調査・調査報告書、聴力障害者情報文化センター、1995

*2 E & Cプロジェクト、バリアフリーの商品開発、日本経済新聞社、1994

*3 いくおーるinTokyo'96、ベターコミュニケーション研究会主催、1996.8.23,24

*4 季刊「いくおーる」20号記念特集みみ・情報源'96、ベターコミュニケーション研究会、1996

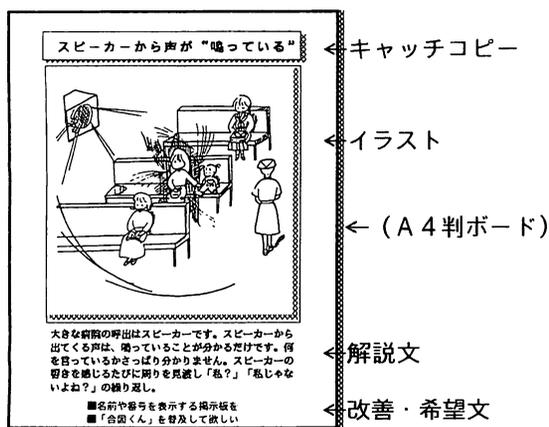


図2 パネルの様式と記載内容例

3. パネルの内容 (様式は図2のとおり)

3.1 物音や合図の音が分からない。見て分かる方法は?

- ナベがふっとうしていることが分からない。(図3)
- ドアをたたく音が分からない。(図4)
- FAX きましたよ! 故障ですよ!

3.2 注意を知らせる音。「こんな大きな音でも」というような音も分からないことがある。

- 自動車のクラクションが分からない。(図5)
- 救急車のサイレンが分からない。(図6)
- ホイッスルが聞こえない! イエローカード?

3.3 スピーカーからの音や案内は、闇の中の手招きのようなもの。はたしてその実体は?

- 「重量オーバー」警告音。知らずに大恥。(図7)
- スピーカーから声が“鳴っている”(図2)
- 場内放送ってどうして「声」だけなの?(図8)

3.4 音が音を邪魔する。自分が出す音が分からないやかいかいな音たち。

- 掃除機の音で他の音が聞こえない。

- ラジカセの音量調節が分からない。(図9)
- 補聴器の“ピーピー”自分には聞こえない。(図10)
- 3.5 電話は便利な通信機器→その電話が使えない→だからファックス。
 - 「～だそうです」「～だって」のくり返し。(図11)
 - 「出前メニュー」にFAX番号が…ない!(図12)
 - 出前どころではない! 救急車を!
- 3.6 話しかけられても分からない。話しができても答えが分からない。一方通行の道。
 - 最も単純な不便さ。走り去る姿を見送る。(図13)
 - 注文票に話しかけないで。私に話しかけて。
 - 「行き先通じたかな?」(図14)
- 3.7 ちょっとした情報がつかめない。
 - どうせ買うなら納得したい。(図15)
 - 安売りの呼び声が分からない。
 - ドラマだって、その一言が知りたい。(図16)
- 3.8 「コミュニケーション」の問題は、永遠に不滅ですか?
 - 始めゆっくり、あとはベラベラ。(図17)
 - バスケットのコートに立っているいるようなもの。(図18)
 - 健聴者と交じりあった会話がたいへん。
- 3.9 楽しめない、知識となる情報を得られない。そして危険を回避できない。
 - 映画やコンサートの楽しみも半減
 - 知識と情報から取り残される!(図19)
 - 「逃げろ、こっちだ!」誘導が分からない(図20)

4. まとめ

イラスト表現の効果で分かりやすい情報が作成できた。展示会参加者からの問い合わせで、団体への貸し出しも行い、情報誌への掲載を含めて社会への啓蒙の目的が達成されたと思われる。また、制作した学生本人にとって、自己の障害を問い直す機会になったと思われる。



写真1 作成したパネル

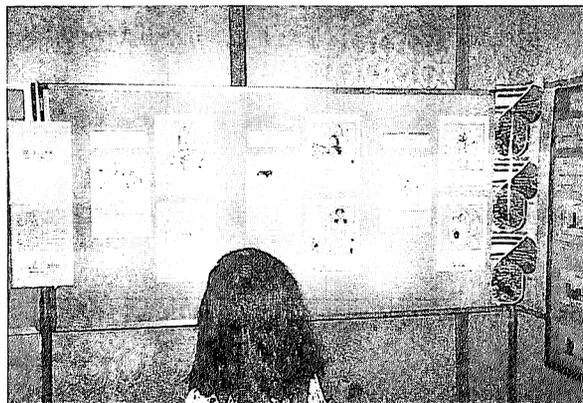


写真2 イベントでの展示の様子

鍋が沸騰していることが分からない



食事の準備、たいへんです。鍋を使ってみそ汁、煮物。ヤカンでお湯をわかし、次は…。忙しい、忙しい！ちょっと目を離した間に鍋のことを忘れてた。お鍋からふきこぼれても、気づかない！鍋に穴を開けだめにしようだけでなく、アツがふきこぼれて火が消え、ガスがもたら危険！

図 3

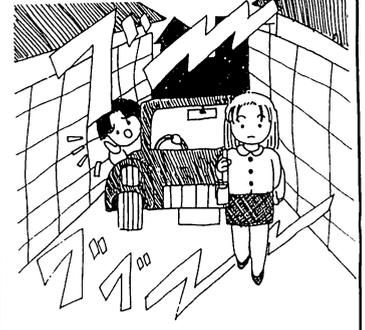
ドアをたたく音が聞こえない



「大変だ！至急の連絡だ」何も気づかず、TVゲームに熱中する私。次の日、友達に会ったら、昨日、サークルの会合があったそうだ。人が来たときも、音が分からないのも困ります。うかつにドアを開けると、しつこいセールスマンにつかまることも。

図 4

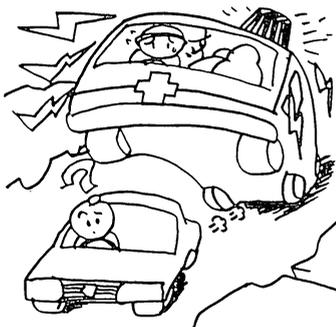
車のクラクションが分からない



道を歩いていたら突然車が。あとで聞いたら、ずっとクラクションを鳴らし続けていたそうです。自転車のベルも分かりません。注意はしているんですが…。見通しの悪い角では、車が来ていることが分かりません。

図 5

救急車のサイレンが分からない



「早くどいて下さい！救急です」ピーポーピーポー！運転中に救急車が来た時、車内ではサイレンがあまり聞こえないことがあります。特に、昼間はランプの光も分かりにくい。聞こえないために犠牲者が出るなんてイヤですね。

図 6

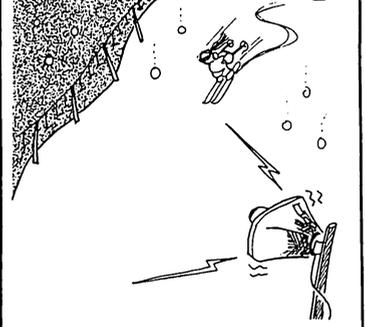
「重量オーバー」警告音知らずに大恥



エレベーターのドアがなかなか閉まらないと思ったら…。それは「重量オーバー」だったため。こんな時、最後になった人が降りなければならないのです。最後に乗った私が降りなければならないに気づかず、しばし、羞な視線の矢が私に向けられたのです。恥ずかしいー。

図 7

場内放送ってどうして「声」だけなの？



ナイタースキーで、滑っているのは私だけ。「今日は人が少ないな？」と思いつながら滑っていました。実は、そのコース「滑っては行けない」と放送連絡があったそうです。どうしてこういうときの連絡はスピーカーだけなの？駅などの施設の中の連絡もスピーカーが主役です。

図 8

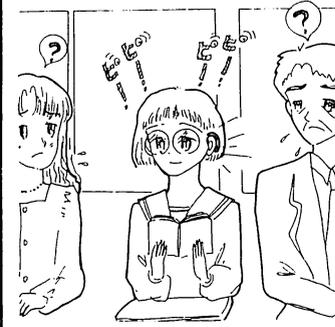
ラジカセの音量調整が分からない



ラジカセなどで音楽を感じる楽しさも、音量の調節が分からないために、隣の部屋の人に迷惑をかけてしまうことがあります。喫茶店で話しているとき、思わず大声を出して笑うこともあります。そんな時の自分の声は何デシベル？

図 9

補聴器の“ヒュー”音自分には聞こえない



補聴器のイヤーマールドにすき間できて、補聴器に入った音がまた補聴器に入ると「ハウリング」という“ヒュー”音が出ます。この音は、自分では聞こえません。周りに迷惑をかけているのではと神経を使います。

図 10

「～だそうです」「～だって」の繰り返し



会社などにはファックスが普及していますが、一般家庭全員が持っているわけではありません。ファックスを持っていない相手に、どうしても連絡しなければいけない時は大変です。健聴の家族に「取り次ぎ」を頼みますが、手間がかかったり、大切な情報を誤って伝えられたりすることもあります。

図 11

出前メニューにFAX番号がない!

「食べる」それは私の一番の「幸せ」。今日はピザ食べたいなー。「シーフードの特だ!とろけるチーズの香りがたまりません」「注文だ、注文だ...あー電話番号だけ!」。どうして、ちんちんメニューにファックス番号がないの!...と、あきらめることが多いんだー。

図12

最も単純な不便さ「走り去る姿を見送る」

「それでは」「さよなら」、走り去る彼。「あっ、忘れてた。明日の待ち合わせ時間は?」「オーイ!」後ろを向いてしまえば呼び止めることができます。

図13

「行き先通じたかな?」

タクシーの運転手さんに行き先を伝えるとき、自分では分かりやすく、はっきりと口頭で伝えてはいるつもりです。でも、通じたかどうか心配です。運転手さんは前を向いているので、言っていることが分からず、分かったのか分からないのか?

図14

どうせ買うなら納得したい

ショッピングの楽しみは、なんとと言っても良いもの安く買うこと。いろいろと説明を受けたいと思うけれど、店員の説明が分からない。値段交渉もしにくい。納得をお願いしたら、めんどろがられる。仕方ないので自分で調べて、たくさんのお店を見て回って自分で納得して買うしかない。

図15

ドラマだってその一言が知りたい

テレビから流される情報の量は想像もつきません。ニュース、報道、ワイドショー、特別番組。ドラマだって人の生活や考え方、社会の動きを伝えてくれます。身近な健康の人にテレビの内容を聞けばよいのですが、何度も繰り返し聞くこと、自分も相手も疲れます。

図16

はじめゆっくりあととはバラバラ

「ゆっくり話して下さい」お願いしても、始めは「ゆっくり話す」ように注意してくれたらだんだんと健康者の会話の早さになっていく。優しい健康者の友人の場合でもそうなりません。ついて行くだけで精一杯。何回も「ゆっくり話して」「早くて分からない」と言うのも気がげます。

図17

会議はバスケットのコートに立っているようなもの

健康者との会議では、飛び交う意見、突然みんなが笑う、何かが決まった様子など、劇一刻と騒がし過ぎていく。まるでバスケットのドリブル、パス、シュートのようなものです。そんなコートの中に一人で立たされているような気分。まったくボール(話し)がつかめません。

図18

知識となる情報から取り残される!

文化講演会、研究会など、知識を得るための集まりがあります。周りの人は、うなずいたり、メモを取ったり情報をたくさん受けとめている様子に比べて、あまりにも差があり過ぎます。

図19

「逃げる! こっちだ!」その誘導が分からない

阪神大震災、地下鉄サリン事件など、非常事態が多く発生しました。こんな時、是非、聞こえない人のことを考えておいて下さい。声やスピーカーで避難誘導を呼びかけても聞こえません。避難誘導の表示があっても、どちらに逃げた方がよいか判断できません。

図20